



オリンピック・パラリンピックのイメージ

明治大学 政治経済学部
教授 高峰 修

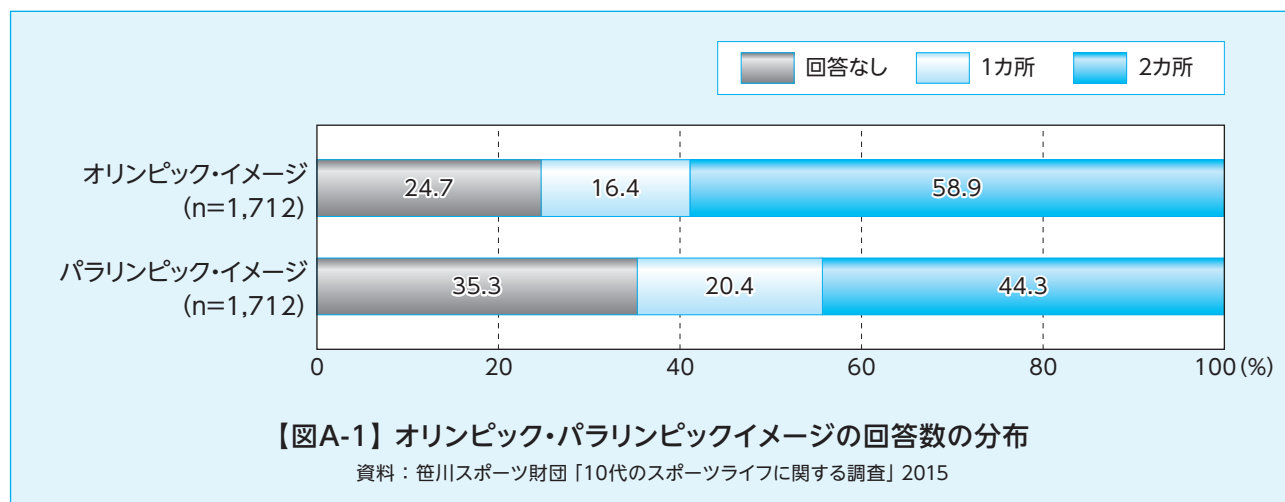
東京でオリンピック・パラリンピック大会が開催される5年後の2020年、現在の10歳代の青少年はおよそ高校生から社会人になり、オリンピックやパラリンピックとさまざまな関わりをもつと期待される。今後、青少年向けのいくつかのオリンピック教育が展開され、オリンピズムやオリンピック・ムーブメントに対する理解が深まると思われる。それでは5年後に開催を控えた現時点で、日本の青少年はオリンピックやパラリンピックに対してどのようなイメージを持っているのだろうか。本稿では、日本の青少年がオリンピックやパラリンピックに対してもつイメージの全体像について量的、質的に検討した。

A-1 オリンピックとパラリンピックのイメージに関する回答数の傾向

オリンピックとパラリンピックのイメージそれぞれについて回答欄を2カ所用意し、自由記述によって回答を求めた。図A-1にその2カ所の回答欄への反応の分布を示した。オリンピック・イメージについては2カ所とも回答した人の割合が58.9%であるのに対して、パラリンピック・イメージについては44.3%にとどまる。

また2カ所とも回答しなかった無回答の人は、オリンピッ

ク・イメージでは24.7%であるのに対してパラリンピック・イメージでは35.3%である。ここでは統計分析を行っていないが、パラリンピック・イメージに比べてオリンピック・イメージへの回答が多い傾向を確認できる。つまり、青少年はパラリンピックよりもオリンピックのほうをイメージしやすいのだと思われる。



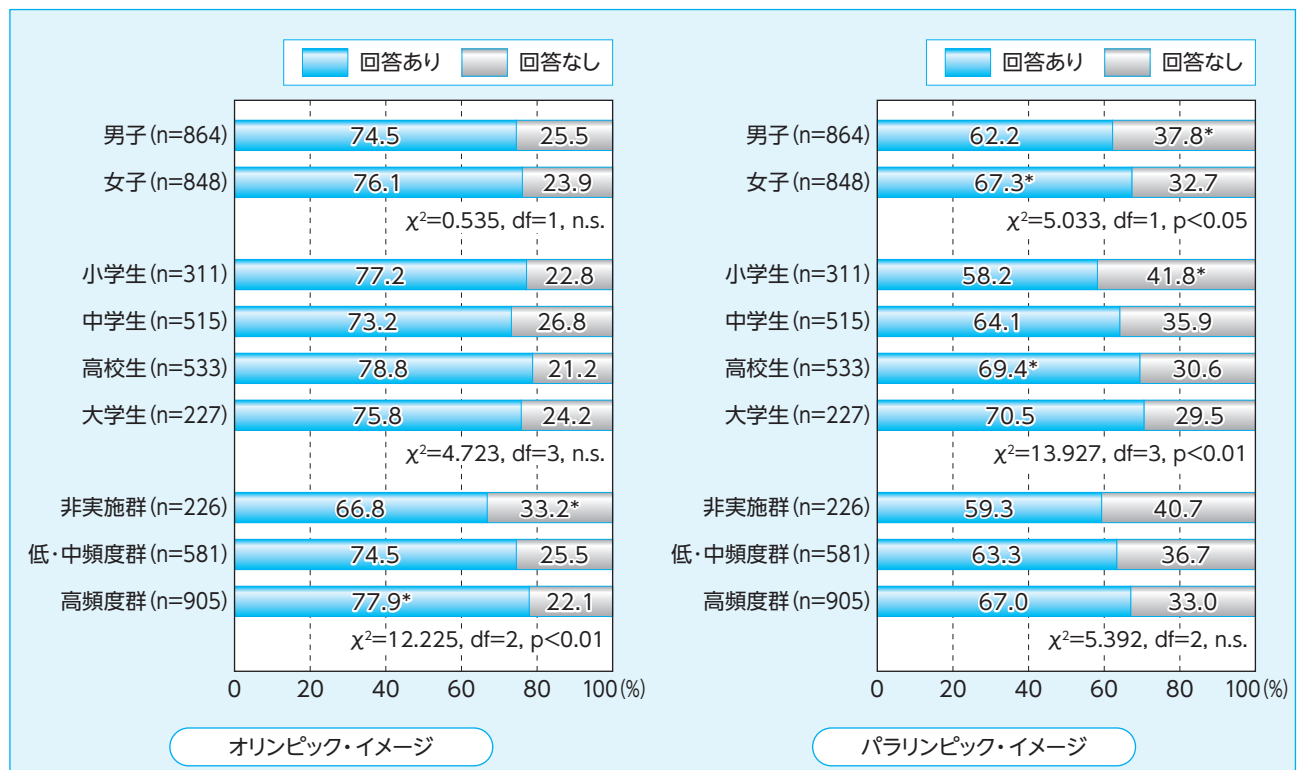
A-2 諸属性別にみたオリンピック／パラリンピック・イメージの回答の有無

図A-1でみたオリンピックとパラリンピックのイメージへの回答数を回答の有無別にまとめ直し、性別、学校期(小／中／高／大)、運動・スポーツ実施頻度群(非実施／低・中／高頻度)との関連について検討した。図A-2にはその分析結果の一部を示した。

性別で比較したところ、オリンピック・イメージに回答した人の割合は男子で74.5%、女子で76.1%であったが、パラリンピック・イメージのそれは男子62.2%、女子67.3%であり、オリンピック・イメージについては男女で回答の有無に違いはみられなかったが、パラリンピック・イメージについては男子よりも女子がより回答する傾向がみられた。また、男女いずれにおいても、パラリンピック・イメージへの回答はオリンピック・イメージへの回答と比べて10%前後少なかった。そして男子は女子よりも、オリンピック・イメージと比べてパラリンピック・イメージでは回答の減少傾向が強い。

学校期で比較すると、オリンピック・イメージについては小学生から大学生までの学校期によって回答の有無の分布に偏りはみられなかったが、パラリンピック・イメージについては小学生が回答せず、高校生がより回答するという傾向がみられた。また図A-2からは、パラリンピック・イメージに回答した人の割合がオリンピック・イメージに回答した人の割合よりも低い結果も確認でき、その差は大学生で5.3ポイントであるのに対して小学生では19.0ポイントであった。つまり、小学生におけるパラリンピック・イメージの回答率が低く、パラリンピックは小学生にとってはまだイメージが浮かびにくいスポーツイベントと思われる。

運動・スポーツ実施頻度群で比較すると、オリンピック・イメージの回答において分布の偏りが確認された。具体的には非実施群で回答せず、高頻度群で回答する傾向がみられた。



【図A-2】オリンピックとパラリンピック各イメージへの回答の有無と諸属性の関連

注1) *: 残差分析の結果、有意に分布が偏っていたことを表す

注2) 学校期: 「その他の学校・進学準備中」「勤労者(15~19歳)」「無職」は、この分析においては対象外とした

注3) 運動・スポーツ実施頻度群: 運動・スポーツ実施レベル(5群)について、レベル0を非実施群、レベル1・2を低・中頻度群、レベル3・4を高頻度群に再分類した

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015

A-3 オリンピックとパラリンピックのイメージを特徴づける頻出語

オリンピックとパラリンピックのイメージがどのような語によって語られているのかを確認するために、それぞれの頻出語上位10語を抽出した(表A-1)。まずオリンピックについては、「世界」や「金メダル」「東京」という語を用いてイメージが表現される。また、競技としてオリンピックから連想されるのは「水泳」や「サッカー」などである。

他方、パラリンピックを特徴づける語としては「障がい」「車いす」があり、競技名としては「テニス」と「バスケットボール」があがっている。このうち、「車いす」は「車いすの人」や「車いすで行う競技」という表現であったり、あるいは「テニス」や「バスケットボール」とセットで使われていたりする事例が多い。このように、パラリンピックが「障がい」をもつ人のスポーツ大会であり、多様な競技種目の中でも、特に「車いす」に乗った競技によって強く印象づけられていることがわかる。

また、「がんばる」という語があがった点も特徴的である。この語は動詞として集計されているが、実際の記述の中では「障がいがある人ががんばっている」や「がんばっている人」といったようにパラリンピックアスリートを形容する表現として使われている。パラリンピックのイメージを表す語として使われる「オリンピック」は、「障がいをもつ人のオリンピック」、あるいは「オリンピックほど有名でな

い」といったように、パラリンピックをオリンピックと関連づけて説明する文脈で用いられている。

オリンピックとパラリンピックのイメージとして回答があった件数のうち、各頻出語がどれくらいの割合を占めるのかを示したのが表A-1のパーセンテージである。オリンピック・イメージとして最頻出であった「世界」の133回は、オリンピックのイメージとして回答があった2,298件においては5.8%を占めるに過ぎない。しかしながら、パラリンピック・イメージで最頻出であった「障がい」321回は、パラリンピックのイメージとして回答があった1,866件の17.2%を、「車いす」は15.4%を占めた。

また、オリンピックとパラリンピックのイメージとして使用された語数を確認したところ、オリンピック・イメージとしては合計798語、パラリンピック・イメージとしては646語が使われており、パラリンピック・イメージを表現する語数はオリンピック・イメージを表現する語数よりも150語ほど少ない。図A-1において、オリンピック・イメージに比べてパラリンピック・イメージへの回答が少ない傾向を確認したが、そうした傾向と関わってパラリンピックを表現する語彙がオリンピックよりも少なく、またパラリンピック・イメージを表現する言葉が「障がい」や「車いす」といったいくつかの語に集中する傾向にあるといえる。

【表A-1】 オリンピックとパラリンピックのイメージ頻出上位10語

オリンピック・イメージ			パラリンピック・イメージ		
抽出語	出現回数 (n=2,298)	%	抽出語	出現回数 (n=1,866)	%
世界	133	5.8	障がい	321	17.2
金メダル	125	5.4	車いす	288	15.4
スポーツ	116	5.0	テニス	171	9.2
選手	115	5.0	バスケットボール	145	7.8
東京	105	4.6	人	145	7.8
大会	101	4.4	がんばる	114	6.1
人	94	4.1	スポーツ	111	5.9
水泳	87	3.8	大会	79	4.2
サッカー	83	3.6	選手	76	4.1
メダル	79	3.4	オリンピック	72	3.9

注1) 分析にはKH Coderを使用した。KH Coderは、アンケートの自由記述や新聞記事などテキスト型データを計量的に分析するためのフリーソフトである。

注2) オリンピックのイメージとして回答があった件数は2,298件、パラリンピックでは1,866件である。なお、イメージの記述は、例えば「世界中のスポーツ選手が集まって金メダルをねらう」といったように、一件の記述において頻出語が重複して用いられているため、表A-1のパーセンテージを合計しても100%にはならない。

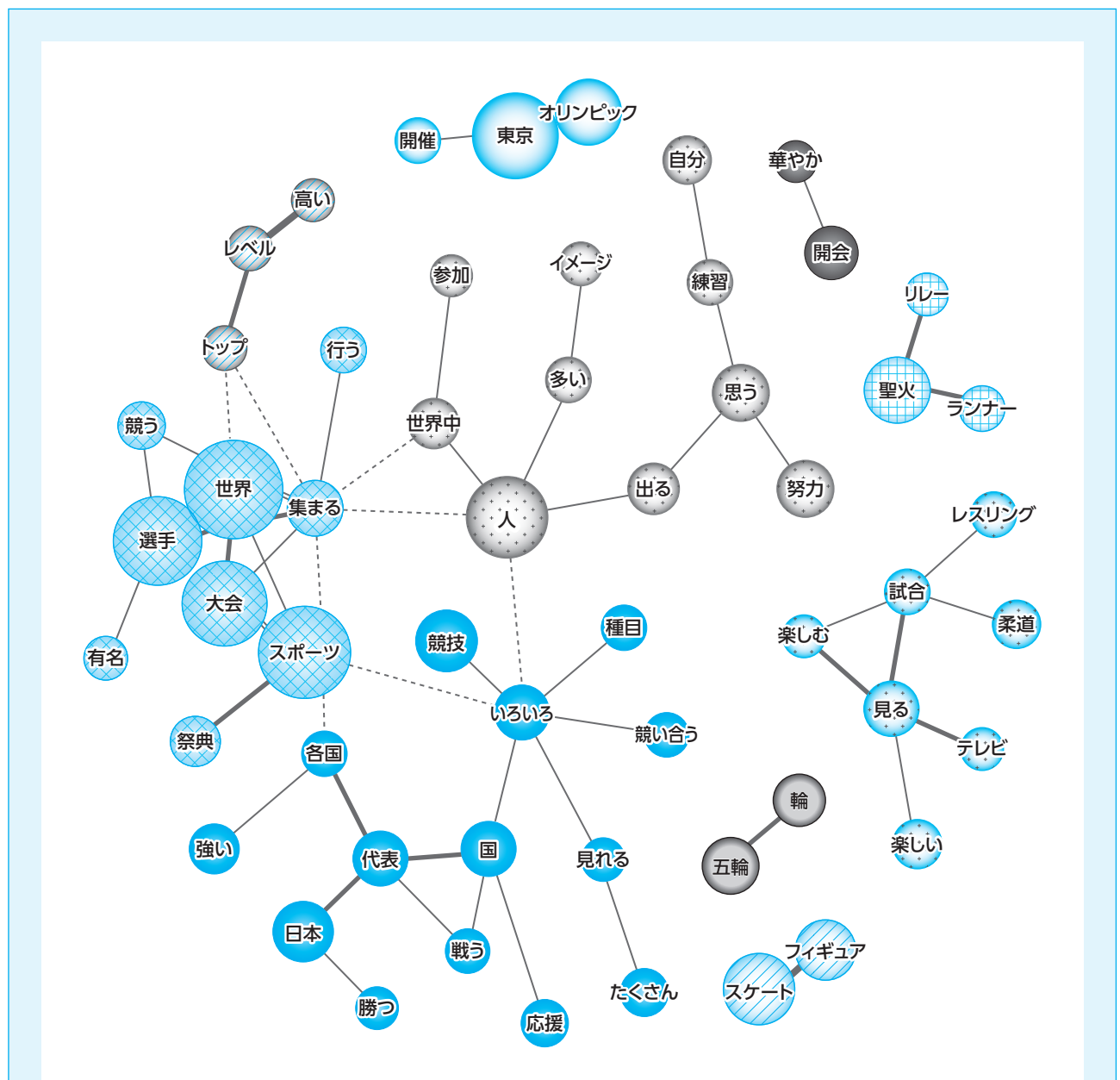
資料：笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015

A-4 オリンピックとパラリンピックのイメージを特徴づける語の関連

表A-1ではそれぞれのイメージを表す頻出語をリストアップしたが、そうした語と語の関連はどのようになっているのだろうか。このような語と語の関連の強さを視覚的に把握するために、共起ネットワーク*を図A-3、図A-4に示した。

図A-3に示したオリンピック・イメージの共起ネットワークにおいては、まず図の左側に「世界」「選手」「スポーツ」

「大会」の語の円が大きく、かつ円を結ぶ線が太い。これらの結果から、回答者たちがオリンピックについて「世界から有名な選手が集まり競う大会」「スポーツの祭典」というイメージを共有していると推測される。図の上部には「東京オリンピック開催」というイメージ、右側には「レスリングや柔道の試合をテレビで見る楽しみ」というイメージが表現されている。図の中央よりも下には「いろいろな



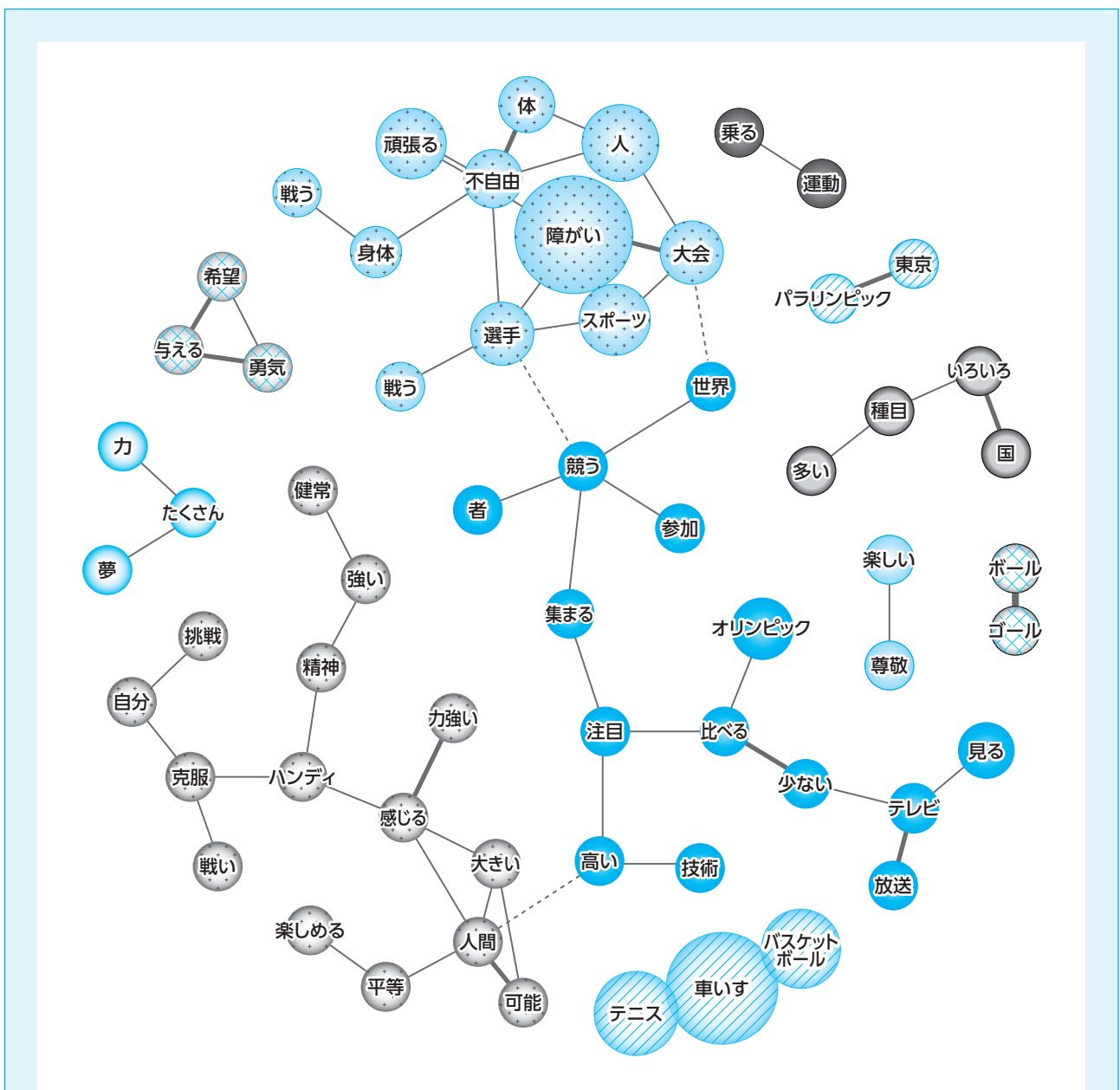
【図A-3】オリンピック・イメージの共起ネットワーク

注) 分析にはKH Coderを使用した。KH Coderは、アンケートの自由記述や新聞記事などテキスト型データを計量的に分析するためのフリーソフトである。
資料：笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015

競技種目で競い合うのをたくさん見られる」、「いろいろな国の代表が戦うのを応援する」「日本代表が勝つ」といったイメージを確認できる。

図A-4に示したパラリンピック・イメージの共起ネットワークでは、まず図の上方に「障がい」の大きな円があり、その周りに「体」「不自由」「頑張る」「選手」「スポーツ」「大会」などの語が位置し、ここからは「体が不自由な選手が頑張る」「障害をもつ選手のスポーツ大会」といったイメージを読み取れる。

図の下方には、表A-1でも確認した「車いすバスケットボール」や「車いすテニス」がイメージとしてまとまっている。さらには、時計盤表記にならうと四時の方向に「オリンピックと比べると少ないテレビ放送」、六時の方向に「人間の大きな可能性」、八時の方向に「ハンディを克服する強い精神」、そして十時の方向に「希望と勇気を与える」といったイメージを確認することができ、それぞれパラリンピックを特徴づけるイメージだといえる。



【図A-4】パラリンピック・イメージの共起ネットワーク

注) 分析にはKH Coderを使用した。KH Coderは、アンケートの自由記述や新聞記事などテキスト型データを計量的に分析するためのフリーソフトである。
資料：笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015

A-5 まとめ

本稿では、青少年が描くオリンピックとパラリンピックのイメージについて量的、質的に検討した。まず量的な側面については、オリンピック・イメージに比べてパラリンピック・イメージへの回答は少なかった。質的な側面について、オリンピックでは「世界」「金メダル」という語によって、パラリンピックでは「障がい」「車いす」という語によって主たるイメージが描かれていた。また、パラリンピック・イメージを表現する語数はオリンピック・イメージを表現する語数よりも少なく、加えてパラリンピック・イメージを表現する言葉はいくつかの語に集中する傾向があった。

このような結果から、現時点ではパラリンピックに対するイメージは、オリンピックと比べて量的に少なく質的には限定的だといえるだろう。5年後に東京オリンピック・パラリンピック大会を開催するにあたり、こうしたパラリンピックのイメージが量としても増え、質の面でも、例えば「障がい者」という一括りではなく障がいの部位が表現されたり、車いす以外の種目が連想されたりするようになるなど、イメージがより広がっていくことを期待したい。

※共起ネットワークとは「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク図」（樋口，2014）である。円の大きさは出現数の多さを意味し、線の太さは共起の強さを意味する。

＜参考文献＞

樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析，ナカニシヤ出版，157，2014

COMMENTS

資料：笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015

- うちの子はスポーツはまったくませんが、みるのは大好き!!TVでスケート、テニス、体操などよくみています。もっと軽い気持ちで始められるスポーツがあるといいなと思います。(18歳女子の母親)
- 以前は、子どもの部活で体育館に足を運んでいました。夫は息子と野球観戦に年に何度か行っています。東京オリンピック・パラリンピック開催も決まったので、テレビでサッカーなどみるだけでなく、もう少しスタジアムや体育館に足を運んでみたいと思います。(17歳女子の母親)
- スポーツ少年団でたくさんのスポーツ（野球、サッカー等）に取り組む子どもたちが増えていてよいことだと思います。送迎をする保護者の皆さんは大変とは思いますが…。親子一緒に頑張れて楽しいと思います。(14歳男子の母親)
- 市で行っているスポーツ大会などの参加や、初めて参加する人がより気軽に参加してみようと思えるような誘いかけはもっと積極的でもいいと思います。(16歳男子の母親)
- できる子とやらない(できない)子との格差はどんどん広がっている気がします。体力向上だけでなくチームプレイや集団意識、失敗を全体で受け入れる意識など、多くを学んでほしいと考えます。(13歳女子の父親)
- 子どもから高齢者まで気軽にスポーツができる環境（特に施設）を多くつくって欲しい。年少の子どもがいる家庭でも参加しやすい施設やサービス、またヨーロッパのように部活以外に生涯を通じてスポーツを続けられる仕組みがあるとよいと思う。(19歳女子の父親)
- 近所に気軽に行ける体育館がなく、やりたい時にやりたいスポーツができません。地域体育館を近くに作り、有名なスポーツ選手を招いたりして子どもたちにスポーツを身近に感じてほしいです。(11歳女子の母親)